〝学生のマナー〟を教育の目標として考える

～学生が自立・成長する為の学習サポート～

中村　博幸
（京都文教大学教授）

はじめに

学生の多様化とともに学生のマナー・態度について語られる事が多くなってきた。それには、〝近頃の若いものは…〟的な言説も含まれるが、必ずしもそうとばかりは言えない。大学生としての学習態度・意欲や考え方、さらに価値観まで多岐にわたっている。

しかし、批判される事柄、例えばコミュニケーション、他者への思いやりなどについて、すべての学生が問題なのではなく、しっかりと身につけている学生も見られる。そこで学生全体のレベルアップをはかるには、学生のマナーの違いは何に起因するのかを考え、その上で学生のマナーを教育の問題として捉え学生のマナーを育成するにはどうすればよいかを考えてみる必要がある。

一　問題の背景

（一）学生のマナー

①マナーと習慣

挨拶のマナー、入室のマナーと言った時に、おじぎの角度、握手の握り方、ノックの回数、声のかけ方は…の様にスキル的な角度から考えるのと、おじき、握手、ノックをするなどの習慣を生じた文化的意味から行動規範を考える

のと両面が存在する。短期間で学ぶには前者が能率的であるが、その文化の中に長期間生活するには後者でないと応用が効かない。ここでは後者の立場から〝学生のマナー〟教育を考える。

②学生文化と学生のマナー

文化とマナーは密接な関係にある。（詳しくは後述。）

ところで学生文化は社会文化のサブカテゴリーであるが、それはまた、社会文化へ接続可能なサブカルチャーでもある。

かつて学生文化は旧制高校に代表される正統学生文化が存在した。そのような伝統的学生文化の中で形成された伝統的な学生のマナーが、現在の学生文化の中で変質または消滅するのは当然であり、別の新しい学生のマナーが生じていると考えるのが自然である。むしろ〝新しい〟学生のマナーを社会のマナーに接続するにはどの様な教育が必要であるかを考えるべきである。

③学生のマナーと若者のマナー

一九六〇年代までは、学生文化はさらに若者文化のサブカルチャーとして存在し、他の若者文化と明確な差異があり、むしろ対立する文化であった。しかし現在の学生文化は他の若者文化とボーダレスになり、それよりも、世代間のギャップが世代間異文化としてクローズアップされている。（電車内での化粧、ヘアースタイルや服装など。）

したがって、学生のマナーと若者のマナーが混同して語られる事も多く、改めて次の視点を考え直す必要がある。学生のマナーだから大学で教育するのか、若者のマナーを大学でも分担して教育するのか、という事である。

（二）社会における基礎力

①社会の構成

文化・規範を同一とする社会全体の構成を図1の様に考えてみる。そこでの構成員は大きく三分類できる。

a．成人

狭義の社会（以下、社会）で成員としてメンバーシップを認められる者

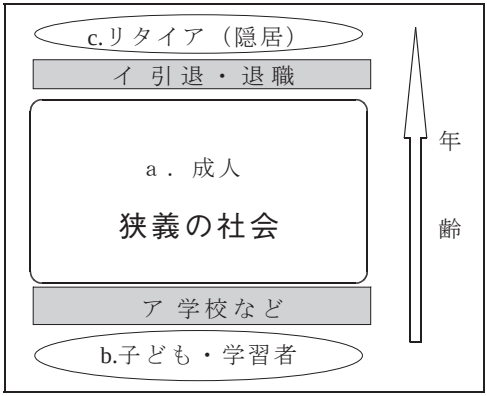

図1　社会の構成

表１　社会（狭義）で必要な力

Ⅰ.しきたり的	モラル	道徳　など
	作法	冠婚葬祭、もてなし、会食　など
	ルール	交通ルール、法律遵守　など
Ⅱ.教養・知識	歴史・地理	名所・旧跡、名物　など
	伝統文化	伝統芸能、祭礼、年中行事　など
	風俗・習慣	その社会で用いられている衣食住に関する知識・技能
Ⅲ.基礎力	行動する力	・地域、地会で活動する力…世話役、長老 ・「社会人基礎力」（経済産業省）　など

b．子ども・学習者

成員となる為のモラトリアムのメンバー

c．リタイア（隠居）

社会から引退して、悠々自適のメンバー

※旧来の固定型社会では、年齢に伴って単線型であったが、変動系社会では、上下に行き来し、引退後にbに入る事もある。

②社会で必要な力

社会の成員として認められるには表1の様な力が必要となる。Ⅰはその文化に所属（生活）しないと見えないものであり、Ⅱは学習によって習得可能ではあるが、表面的な知識ばかりでなく、むしろ文化的背景の方が重要である。

そして、ⅠとⅡを組み合わせた上で、実際に課題解決できる力がⅢである。

③学生文化と接続する社会文化

ところで図1及び表1の具体的内容は、社会（広義）ごとの文化により異なる。しかも地域・年代といった事ばかりでなく、その社会の公私・職業、社会階層、年齢といったサブカルチャーによっても異なる。とすれば、学生が卒業後に入っていくサブカルチャー社会（大卒者社会）の文化やマナーと学生の文化との接続がはかられるのは当然である。

④文化やマナーと接続としての学校

図1の社会（狭義）に入る為の〝教育の場〟として学校があったと考えると、学校文化・マナーは社会文化・マナーと深い関連を持つ。つまり、b学習者（子ども）を、一度学校（大学）を通過する事により、a社会成員とする役目が学生文化・マナーにはあったのではないか。

しかし、その学生文化・マナーと現実の〝学生〟のギャップが大きくなったのではないか。その社会の文化（表1）には変化がなく、学生の文化のみが変化したならば、それは当然であろう。

初年次教育をはじめとする大学入学期の教育には、それを改めて教育する役割が課されているのではないだろうか。

二　学生の為の社会への接続教育

学生のマナーは、学生文化と関係が深く、それらは大人の社会と関連が深い事について述べてきたが、ここではどうすればよいかを考える。

（一）ギャップ解消を教育として考える

大学と社会の接続を図２の様に考える。実線が本来の学生の成長である。しかし、入学時の現状が○印であり、点線の様に成長するならば、どこかでギャップを埋めなければならない。

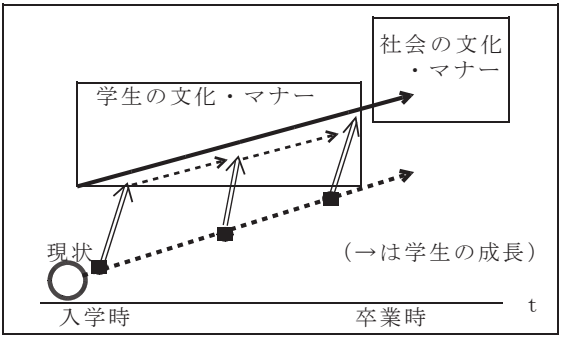

図２　学生と社会の接続

（二）様々な教育

現在行われているキャリア教育や入学期教育を前記の視点から分類してみる。

①キャリア教育－１

就職対策として卒業学年を中心に行われてきた社会マナーなどの教育は、このギャップを最後で埋めようとしたものである。（図２右側の＝線）

②キャリア教育－２

就職への意欲・動機づけの教育。各種の学内講座や職場体験やインターンシップなどを三年生を中心に、中学年でギャップを埋めようとしたのがこれにあたる。（図２中程の＝線）

③入学期教育（リメディアル教育、初年次教育）

大学での学びに対応できるように、入学期にギャップを埋めておこうとする教育がこれにあたる（図２左側の＝線）。社会人基礎力の教育なども、この視点に含めるとわかりやすい。

（三）初年次教育の三種類

学生の文化・マナーとのギャップの視点で初年次教育（演習）を分類してみる。東京大学教養学部「基礎演習」テキストの『知の技法』が出版されたのが一九九四年である。この頃から「初年次演習」が正規のカリキュラムに登場し、テキストも出版される。しかしその内容は大きく異なる。難易度中程度の大学を中心にレポートの書き方、資料の取り扱い、発表（プレゼンテーション）といった、学習スキ

ルが取り扱われる。しかし低難易度大学では授業の受け方、学生生活の過ごし方といった内容が多くなる。これはあるべき学生文化（マナー）と現状のギャップの大きさにより、とりあえず教えるべき内容が異なるからであろう。一方ギャップの少ないであろう高難易度大学である東大の『知の技法』では、レトリックなど学問への認識・視点を中心に、知のゆさぶりに終始している。

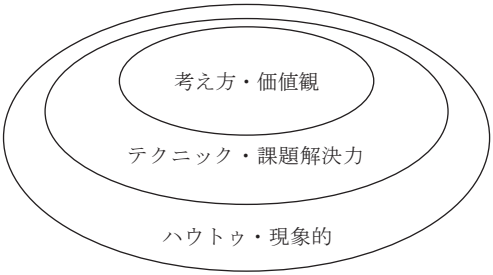

図３　学生文化・マナーの教育

つまり初年次教育（演習）は、社会文化（マナー）のサブカテゴリーである学生文化（マナー）とのギャップの大きさの度合に応じて行われてきているのである。

（四）学生のマナーや社会との接続を教育として考える

ここまで見てくると学生のマナー教育や社会との接続教育は、実は学生文化への適応をさせる教育であることが見えてくる。それでは教育目標をどこにおけばよいのか。

ギャップの大きい場合は学生文化（マナー）について考え方・価値観からの教育が必要である。（図三）

多くの大学で、もう一度学生文化（マナー）の教育を根本から見直す時が来ているのではないだろうか。

三　具体的な教育方法の提案

（一）学生としての成長・自立の場の教育

〝社会〟（図１）の視点から見ると、学生のマナー・学生の文化・大学の学習は、それぞれ別々に教育する（又は学ぶ）事ではない。教育目標はトータルに〝学生（身分上）〟が〝学生（実質上）〟になる事と考えられる。

①教育の目的

学生が知識として学ぶ事ではない。（このことが教育評価の難しさにつながる。）学生の文化、マナーに基づいて社会人基礎力的な行動や課題解決ができなければならない。

したがって、学生が自己学習や応用としての課題解決を行なう為の場の提供やサポートが、教育のスタイルであろう。完全に自立する事を目標とした上で最初はなぞり学習からのスタートとなる。つまり足場や仮屋がなるべく早く

外れる事を考えながら、最初は手取り足取りで様々な指導が行われる。

②教育の内容

a第一ステップ（レクチャー）

社会のフレーム（図1）と社会で必要な力の存在（表1）及び必要な力のⅠ・Ⅱ・Ⅲの意味を説明する。その上で、社会人の文化と学生文化の関係性を説明する。

b第二ステップ（レクチャー）

学生文化の内容と学生の基礎力の内容を、グループ討議やレポートなどにより考えさせる。

c第三ステップ（演習）

Ⅲ（基礎力）を身につける為に、カリキュラム上の演習又は授業外学習や課外活動などを通じて実践を行なう。Ⅱ（教養・知識）については、旧来の伝統的学生文化について語るよりも、Ⅱ（教養・知識）がなぜ必要なのか、それの入口部分としての学生の教養・知識とは何か程度に留める。Ⅰ（しきたり的）については、大学内に学生文化が存在しその中で生活すれば、おのずと身についていくものである。したがって、サポート教育はⅢ（基礎力）の育成が中心に行われる。演習のスタイルとしては、グループワーク、アクティブラーニング、協同学習、協調学習などが効果的であろう。

③教育の場面

学生の文化・マナーが改めて教育として必要だということは、彼らが今までに持っている（生徒）文化や価値観からの転換が必要だという事でもある。またその後の自己学習による熟成を考えると、時期は大学入学後の少しでも早い時期である方がよいであろう（図2左側の＝線）。

したがって、学生の文化・マナー教育は、初年次教育の教育目標のひとつと考えるのが妥当であろう。

（二）実践にあたって

実際の教育は各大学の状況をふまえて、カリキュラムやスタイルも異なる（演習のスタイルも同様）。（文献（一））ここでは筆者が手がけた実践（複数大学）について述べる。

①初年次演習を通して

初年次教育の中で、社会で必要な力のⅢ（基礎力）の教育に関しては、カリキュラムとして初年次演習が中核となる。具体的な内容は、各大学の状況に応じて、文章表現、プレゼンテーション、討論など様々であるが、大学で学ぶ為の基礎を包括的に学ぶくくり方が妥当であろう。また前述の初年次演習のモデルの中では、難易度中程度の大学を想定するのが一般的であろう。

大切な事は、初年次演習の二単位（あるいは四単位）の授業内で完結し評価できる内容を教育する事ではない。またある科目への接続やカリキュラム上の特定領域への接続を意識するのではなく、大学の学習への動機づけ、学生の文化、学生のマナーの必要性の喚起を目的とする事である。さらに、カリキュラムは固定的内容ではなく、数年毎の改訂が望ましい。それは入学する学生の状況が変化する為である（図2のギャップの程度）。常に現在の学生モデルに基づいたカリキュラムの構築が必要である。

初年次演習の開講形態については、文献（二）などを参照して欲しい。

②研究室の自主ゼミグループ

大学の各研究室には、履修登録を行った正規のゼミ生の他に、教員との個人的なつながりや、教員の研究テーマに関心を持つ学生などの何となく研究室を構成する学生も存在する。図2のギャップが少なければ、正規のゼミ生とそれ以外の学生グループの学生文化・学生マナーは一致する。またギャップが存在する場合も一般に後者の方がギャップの度合いが少ない。そこで後者のグループに意図的に学生文化形成のシミュレーションを行う（文献（三））。これを自主ゼミグループと呼ぶ。このグループの目的は、学生文化の参照モデルをつくり、前者のグループに影響を与えることである。

③初年次演習と自主ゼミグループの役割

社会（狭義）で必要な力のⅢ（基礎力）については、初年次演習の教育効果が大きく、Ⅰ（しきたり的）については自主ゼミグループの教育効果が大きい。特に自主ゼミグループでの学生文化の育成が成功すれば、大学内の他の場面でのリーダーやペースメーカーとしての活動が期待される。また、初年次演習のT・Aやピアサポート学生としての活用が可能となる。筆者の実践の中で、卒業生が、図1の社会の中で自立して課題解決をしていこうという姿も多く見受けられた。

四　まとめ

学生のマナーは学生の文化に関係が深い事、また一見、関係なく思われる社会との関わりも深いという考え方について述べてきた。したがって学生のマナーを教育として行うことは、大学の学習の為の初年次教育を行う事につながるという考えについても述べた。

しかし、社会そのものが固定型から変動型になりつつある時、教えるべき学生のマナーとは何なのかもあわせて考

えるべきである。すぐに役立つハウトゥではなく、彼らが社会で活動する数十年後に役立つ事を視野に入れた学生のマナーでなくてはならないであろう。

文献

（一）河合塾編『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』二〇一〇年　東信堂
（二）濱名篤・川嶋太津夫編著『初年次教育』二〇〇六年　丸善株式会社
（三）マーチン・トロウ著、天野・喜多村訳『高学歴社会の大学』一九七六年　東京大学出版会　一六二頁～